Here Now Bestopia
ベストピア Bestopia
第409号
2021年3月号
パリ通信
第111号

文化遺産データベース

１．パリのCOVID-19

2020年3月17日フランス全土で都市封鎖が始まった。マクロン大統領の「フランスは戦時下である」の演説から長い一年が過ぎた。救急医療逼迫は今なお続いているが、ワクチン接種と感染拡大のスピード争いに集約されつつある。現時点で480万人(フランス人口の7,24%)が第1回目の予防接種を受け、220万人(3,3%)が2回の接種を終了している。高齢者施設の予防接種が最優先で実施され、家族の面会や高齢者の外泊が可能になった。長いトンネルを抜ける灯が見えつつある。

２，「アジール・フロッタン」と対話する日々

平底船「ルイーズ・カトリーヌ」号の修復も少しずつ前進している。浮上から五ヶ月。セーヌ川増水の危険を乗り越え、亀裂を樹脂で補填する応急処置を行い、破損したコルビュジエ設計の水平窓を仮に塞ぐ工事がまもなく始まる。コンクリート、鉄筋、柱、屋根など、浮上後の調査が4月上旬には完了する。調査報告書をフランス文化省とル・コルビュジエ財団に提出し、修復に値するかの審議を受けなければならない。
この半年、構造躯体だけになった「アジール・フロッタン」と毎日対話している。70mの長い渡し板を往復し、ヒビや亀裂を確認し、雨水をポンプアップしながら、与えられた時間と空間を感じている。船の長い歴史と一人だけで向かい合う貴重な時間だ。

３，フランスの文化遺産データーベースに選ばれた理由

「ルイーズ・カトリーヌ号」が文化財指定を受けたのは2008年12月9日である。フランス文化省は一般の人々に広く文化遺産を知ってもらう目的で、以下のオープンデータベースを開いている。

1）モナリザ・データベース: フランスの美術館作品
2)メリメ・データベース: 文化財指定を受けた建築と受けていないが貴重な建築
3) パリシイ・データベース: 文化財指定を受けた不動産と貴重な不動産
4) メモリー・データベース: 文化省が保存する写真
5) MNRデータベース: 押収され所有者が分からず一時的に美術館で保管されている作品。

「ルイーズ・カトリーヌ号」は建築の範疇には入らず、文化財指定を受けた不動産としてパリシイ・データベースに情報が収められ、文化財指定を受けた理由として三つが記載されている。
①第一次世界大戦直後に新しい造船技術として鉄筋コンクリート船が建造され、その頂点として今日まで残っていること。
②ル・コルビュジエが既に存在するものの上に付け足した唯一の作品でありながら、自身の建築理論を実践していること。
③フランスの一時代として、救世軍が貧困な人々を救済した場所であったこと。三重の歴史的価値を認められたことが分かる。

４，姉妹船「ジュ・セール(Je sers)号

19世紀後半から試作が始まった鉄筋コンクリート船は、第一次世界大戦直後、鉄や物資が大量に不足する中、急発展、急造船された。今日まで残っているのは3隻で、「ルイーズ・カトリーヌ号」と同じく1919年同じサイズで造られ、のちに改造されたコンクリート船教会「ジュ・セール(Je sers)号」がある。パリから下流に40kmほど離れたコンフラン・サントノリーヌという町のセーヌ川岸に係留されている。
「ルイーズ・カトリーヌ号」(造船時の名称は大戦で被害を受けたヨーロッパの町「リエージュ号」)と同じく1919年石炭運搬船として造られ、1915年ヨーロッパで初めて毒ガス兵器が使われたベルギー、ウエスト・フランデレン州の町「ランゲルマルク」の名前が付けられた。「ジュ・セール号」は文化財に指定されていないが二隻は姉妹船である。
「リエージュ号」は1929年石炭運搬船から難民収容船となり、「ランゲルマルク号」は1935年河川運搬組合に購入され教会へと生まれ変わる。病院船として使われたこともあり、弱者を救済するのは同じだ。（下記写真は筆者・古賀順子さん）

５，コルビュジエの貢献

リエージュ号からルイーズ・カトリーヌ号と名前も用途も変わったコンクリート船「アジール・フロッタン」が文化財指定を受けた大きな理由はやはりル・コルビュジエのおかげだろう。集合住宅理論が極めて分かり易く、シンプルな形で実践された空間、横長の窓一杯に溢れる自然光を取り込む自由な空間で温かい食事とベッドを提供した建築と救済が一体となった貴重な場である。文化財であろうがなかろうが、今も毎日信者を受け入れている教会船「ジュ・セール号」とともに長くセーヌ川に漂っていて欲しいと思う。

もう一隻のコンクリート船「ジュ・セール号」